

# 南富良野短歌会

ひとわたり終わる頃には先に刈りし雑草すでに青めきており  
 晩秋の深山峠は雪化粧白樺の白寒々と冴え  
 大野 孝子

紅葉越し鹿の鳴き声けたたまし雪降る前の山の風物  
 山内 千代

萬草の枯色被りて直に樹つ「金盞花」潔し鮮やかに咲く  
 松本 清

文化の日に「北風岬」を踊るわれ懐かしの曲に思いをこめて  
 三宅 スエ

吹く風は駆け足のやぶに季運び秋明菊の白の身にしむ  
 山田 千代

楚楚と立つ無人の駅の月見草今宵一会は十六夜の月  
 鈴木 文代

秋立ちし庭にダリヤの競い咲く彩りふたたび朝光に映ゆ  
 後藤 敏江

幸せを両手一杯すくひ取り夫と歩みし道かへりみる  
 鍛冶場 渉子

病むでより午睡が多し今日見しは湖面を渡る風光る夢  
 橋見 さえ子

天空に呼ぶ声ありて見上ぐれば白鳥の群弧を描き往く  
 阿部 巖

初雪にわななきつつも野の花よ昇る朝日に凜として立つ  
 津田 みね

また一つ大型店の進出でマチの老舗がさみしく消える  
 久保 マサ子

縄文の石器握ればしゅくりと温もりあること掌の型に添う  
 相川 敏治

庭先に見かけぬ小鳥舞い下りて秋の陽を浴び餌啄きおり  
 菊池 仁子

霜うけて緑かがやくブロッコリー孫にも送る秋は澄みゆく  
 大居 貞子

台風がわが温床をなぎ倒す力が抜けて天を仰ぎ見る  
 小林 吉枝

晩秋の夕陽は燃えるオレンジ色楽しみにしおれば今日は雨降り  
 佐藤 すみ奈

鈴木 セツ子

ひと昔前まで、子どもたちにとつて双六遊びはお正月の定番でした。雑誌の付録の双六で遊んだ記憶のある方も少なくないでしょう。

双六の原形は、樹目を描いた盤上に駒を進めて勝ち負けを競うゲームで、古くから世界各地に見られます。日本には奈良時代に中国から伝えられたといわれ、『日本書紀』にも「雙六（すごろく、すぐろく）」という盤上遊戯具の名が見られます。

区画に絵を描いた紙の上で、さいころを振って駒を進める絵双六は、古代の雙六が変形、あるいは分岐したもので、その起源は16世紀後半の文書に現れる「浄土双六」と考えられています。浄土双六の初期のものは、仏教の世界で人間が住むとされる南閻浮洲を振り出しに、上へ行けば極楽、下は地獄という構図で、区画に記されていたのは文字のみでした。

華やかな絵が描かれた双六が広く出回るようになったのは江戸時代の中期。芝居や役者を題材にしたもの、百人一首からテーマをとったものなど、さまざまな絵双六が人気を競いました。中でも旅行や旅程を主題にした道中双六は、江戸時代を通じてロングセラーで、歌川広重、葛飾北斎といった有名な絵師たちも数多くの双六を残しています。

## 絵 双 六

その後も時勢を絵に写しながら、双六は庶民に親しまれてきましたが、最近では、遊びの世界から急速に姿を消してしまいました。しかし、双六は年齢を問わず遊べるゲームです。このお正月、双六をもう一度復活させて、家族みんなで楽しんでみてはいかがでしょうか。

